国語

大学入学共通テストの試行調査分析（平成二九年度）

広島なぎさ中学校・高等学校長　永尾　和子

第1問　記述式問題（実用的文章）

■ 出典

1　青原高等学校　生徒会部活動規約
2　生徒会部活動委員会の執行部会における生徒の会話
3　資料①　部活動に関する生徒会への主な要望
4　資料②　市内5校の部活動の終了時間
5　資料③　青原高校新聞

■ 出典解説

出典はすべて架空の高校を舞台として作成された文章である。中心となっているのは、2の「生徒会部部活動委員会の執行部会における生徒の会話」である。その会話文中にある傍線部および空欄を、その他の資料を用いて説明あるいは補充する問題になっている。これまでのセンター試験にはなかった実用的な文章を用いた問題であり、三問すべて記述式問題である。

リード文の冒頭に「青原高等学校では、部活動に関する事項は、生徒会部活動規約に則って、生徒会部活動委員会で話し合うことになっている。次に示すものは、その規約の一部である」とあるため、最初に掲載されているのは生徒会部活動規約であるが、これに目を通していると間違いなく時間が足りなくなる。従来のようにまず与えられたテクストを読解することから始める問題ではないのである。

つまり、このように資料を多く使う問題の場合、それらをどう活用すべきなのか、まず全体像をつかむ必要がある。第1問の場合、問1～問3を見れば、2の会話文から出題されていることは一目瞭然であるから、まずこの会話文から読み始めなくてはならない。会話文中にある問いに答えるために、その他のテクストを使うということがわかれば、会話文自体は容易なので、それほど難しい問題ではない。リード文から設問まで、まず全体を見渡して、何が問われているのかを素早く的確に捉え、それに基づいて各テクストを活用すること、さらにテクストの中から必要な情報を捉えたり、テクストの表現を手がかりにしたりして、問われていることに対し、条件に応じて的確に説明することが要求されている。この問題で測られる力は、読解力ではなく、むしろ、情報収集・活用能力、状況判断力、推理力であると言ったほうがよいと思われる。

■ 設問解説

問１　【資料を踏まえて傍線部の内容を説明する問題】（正答率４３・７％）

傍線部に該当する部分を、「生徒会部活動規約」の中から見つけて指定の字数以内で説明する。会話文の中で「ダンス部の設立」が問題になっているので、規約の中でも「第３章　部の新設・休部・廃部」を見ればよいことはすぐわかる。第12条と第13条の前半部分が傍線部の「申請時の条件と手続き」に該当するので、それを字数内に収まるよう、まとめればよい。

問２　【資料を踏まえて空欄を補充する問題】（正答率７３・５％）

会話文の流れから、空欄には兼部にかかわる条件の緩和についての要望が入ることが読み取れる。そこで規約を見れば「第２章　部の運営」の第８条の中にある（兼部）の語に目がとまる。後は、第８条の内容を踏まえて、会話文の文脈に合うように説明すればよい。問２では、会話文と規約の両方を用いて記述の内容を考えなければならないので、多少の推理力が必要である。

問３　【資料を踏まえて空欄を補充する問題】（正答率０・７％）

問３では、設問の条件が、どの資料を踏まえなければならないかを指示している。

まず、条件（４）から、根拠は資料①～資料③の中にあることが読み取れる。次に、条件（２）からは、部活動の終了時間延長を提案する根拠となることを二点挙げなくてはいけないことがわかるが、資料①と資料②が、その根拠を示していることは容易に推測できるだろう。最後の条件（３）は、会話文から、部活動終了時間を延長するに際しての課題が入ることがわかるが、そのことは、規約にも資料①や資料②にもなかったので、当然資料③にある。

ここで、注意する必要があるのは、空欄イの直後に、「なるほど、そう判断される可能性がありますね。それではどのように提案していけばいいか、みんなで考えましょう」という発言があることである。これは、空欄イには課題が入るだけでなく、提案のしかた次第では、生徒会部活動委員会が提案の基本的立場とは反対の判断を下す可能性があることを表す内容が入ることを示している。

これらのことを想定した上で、資料③を読めば、課題とされているのは安全確保に問題があることであり、そのため部活動の延長は難しいと判断される可能性があるということはすぐに読み取れる。

問１～問３まで、平易な会話文の説明と空欄補充であること、解答はすべて規約と資料①～③の内容・語句を抜き出して作成すればよいことから、大問１は資料を読み込んで時間を費やすことさえしなければ、記述とはいえ、比較的簡単に答えられる問題と言えるだろう。記述式問題のねらいが、マーク式では問えない深い思考力・判断力を問うことであるとすれば、この問題はそのねらいを実現するものとは言えないのではないか。資料は「読み込まず」、その使い方を判断することが求められており、答えがどの資料にあるかを見て取り、資料の表現を上手く活用することで解答が作れるという点で、記述式問題としての物足りなさがあることは否定できない。

第２問　論理的文章

■ 出典

宇杉和夫他『まち路地再生のデザイン　路地に学ぶ生活空間の再生術』（二〇一〇　彰国社）

■ 本文解説

近代空間システムと路地空間システムを対比させながら、自然性を持ち、

地域コミュニティの原点でもある路地空間の継承こそ、日本の近代空間計画地の再生における重要な検討課題であることを述べた文章である。

前半「近代空間システムと路地空間システム」では、近代空間システムと路地空間システムの特徴を概観し、それを表1に整理している。その上で、路地空間システムを近代の空間システムと対照的なものとして肯定的に取り上げていくことを表明している。

後半「路地の形成とは記憶・持続である」では、路地空間は自然と一体的であるが故に、地形に結びついて形成されてきたことから、その形成過程について、図を掲示しながら、具体例を挙げて説明していく。そして、近代空間計画地の再建に際しては、全面的に変革するのではなく、ふれあいと場所の原風景である路地空間との関係を計画のテーマとする方法論が必要であると主張している。

後半部分が前半での問題提起を、具体例を挙げて説明しているだけという平面的な構造であることから、設問はおのずと本文の内容や表現についての説明を求めることになっている。だが、都市の空間システムという馴染みのないテーマや建築学者独特と思われる用語の多用に阻まれ、おそらく高校生には読みにくい文章であったろうと思われる。

■ 設問解説

問1　【表中に用いられている語句の意味を文脈に即して説明する問題】

A　機縁物語性　（正答率53・6%）　正解は②

「機縁」とは、「事柄が起こり、または、特定の状態になるべき因縁。きっかけ。機会。または来由、事歴の意」（日本国語大辞典）。

「物語性」「場所性」「領域性」というキーワードも併せて考えると、「人と人とが出会い、そこから何かが生まれる場所」という路地の性格を示す言葉であることが推測される。本文中からは、第2段落に、「ある数戸が集まった居住建築の中で…通行空間」「その場所は生活境域としてのまとまりがある」「近隣コミュニティ」「通行者もそれに対応できている」という表現が読み取れる。これらを総合すると、路地の構造とは、そこに生活する者どうしのコミュニティの場であり、また通行空間ゆえに通行者もそこで他者と出会うことができる場でもあるということになる。このことを的確に説明しているのは②である。

① 路地空間の自然性を説明しているように見えるが、緑を配置していることだけが自然性の尊重を示すことではないし、そもそも「機縁性」の説明になっていない点で誤り。

③ 「外部と遮断された自立的な構造」が誤り。路地は、「ソトの空間から区切られているが通行空間としてつながる」とある。

④ 「人間関係が変容するような、劇的な構造」とは、本文のどこにも述べられていないので誤り。

⑤ 「通行空間から切り離す」が誤り。路地はそれ自体が通行空間である。

B　広域空間システム　（正答率32・0%）　正解は①

表1の分類から、「広域空間システム」は近代道路空間計画システムであることをまず押さえなければならない。すなわち、近代都市計画において、道路はどのように広がっているかということが問われている。また、「ヒエラルキー」というキーワードが並んでいるが、「ヒエラルキー」は、「上下に序列化された位階制の秩序や組織」（大辞林）のことであり、道路建築において、序列を感じさせる場合があることを示している。このことを説明している部分を本文中に求めるならば、「『すべての道はローマに通ず』といわれ、ローマから拡大延長された西欧の道路空間」がこれに該当するだろう。選択肢のうち、この内容を的確に説明しているのは①である。リード文に、

「なお、表１、２及び図３については、文章中に「（表１）」などの記載はない」とあるように、表１中の語句と文章がどこで対応しているかは、文章を全部読んだ上で内容を理解しないと把握できない。Ａの場合は、比較的表１の近くに解答があるが、Ｂは第２段落まで読み進めなければ解答になる部分は出てこないため、正答率が下がったと考えられる。

問２　【文章中の対比的な事柄について違いを適切に説明する問題】
（正答率６１・８％）　正解は②

第２問において最も高い正答率を示した問いである。解答は第６段落の本文中の語句と選択肢中の語句の一致を吟味すればよく、しかも図１と図２が文章のすぐ上にあって、参道型路地的空間とパッケージ型路地空間の違いをわかりやすく説明していることがその理由として考えられる。このように、

ａ　比較的まとまった部分から解答を見つけることができる。

ｂ　選択肢の語句や内容と本文との合致を吟味すればよい。

という解答のしかたは、従来のセンター試験と同じものである。その意味では、「テクスト全体を通じて対比されている事項について考察し・・・」という問題のねらいを十分反映した問題とは言いがたいが、受験生にとっては、「慣れている」という点で安心できた問題だったかもしれない。

パッケージ型の路地については第６段落に「面的に広がった計画的区画にある路地は同様なものが繰り返し連続する」とあり、これは選択肢②の「区画整理された路地が反復的に拡張された路地」に一致する。また、参道型路地も同じ段落中に「目的到着点をもつ」「折れ曲がって分かれ、より広域の次の参道空間に結びつく形式」「城下町にも組み込まれ」とあり、参道型路地と同列にクルドサック型路地が紹介されて、その注釈として「袋小路」であることもわかるようになっている。これらの内容は、やはり選択肢②の「通り抜けできない（＝袋小路）目的到着点をもち、折れ曲がって持続的に広がる、城下町にあるような路地」と完全に一致する。したがって、正解は②である。他の選択肢は、パッケージ型路地、参道型路地の説明がいずれも本文の内容と一致しない。

問３　【テクスト中の図の提示理由を説明する問題】
（正答率１９・２％）　正解は③

正答率が極めて低い原因の一つには、第８段落とその前後の段落とのつながりが読み取りにくいということがあるだろう。

筆者は路地的空間の継承が、近代都市計画の一つの原点になると主張している。第６段落、第７段落で、西欧の区画された街区とその原風景について述べ、第７段落の末尾で、日本の路地は「計画的な区画整形の中にあっても、そこに自然尊重の立場が基本にあ」ったことを述べ、日本の路地が西欧の路地とは立場が違うと指摘している。

ところが、続く第８段落では、日本の街区形式の歴史と継承の例として江東区の方形整形街区方式を取り上げている。これは決して西欧との違いを示すものではない。むしろ江東区の方形整形街区方式はグリッド街路と同じであり、近代西欧の市街地整備の典型である。江東区の街区形成と道路は、江戸時代から継承されてきた街区形式ではあるが、それは掘割に沿ってできているという歴史はあるものの、街区形式自体は「整形を基本とする」もので、筆者が望ましいと思う街区の形を成してはいないわけである。したがって筆者は、第８段落の末尾で「しかし、そこに理想とした成果・持続が確認できるであろうか」と疑問を呈している。筆者が評価しているのは、第９段落に述べる地形・自然が関連する山の手の街区である。この第７～第９段落の流れの中では、江東区の例は、第９段落における路地的空間の継承を引き立てるために抑揚をつける働きをしていると言えるが、その展開がわかりにくか

ったのではないかと思われる。

このように論旨の展開が明快でない上に、建築関係の用語の特異な使い方があり、さらには図や表など多くの情報に目を配らなければならないとなると、受験生にとっては処理能力を越えてしまうに違いない。

正答率が低かったもう一つの原因は、図3に付された説明の中に「自動車交通、駐車スペースにならずガランとした通りもある」と書いてある点が、正解の選択肢③「自動車交通に配慮した」という部分と合致しないと判断した生徒がいるかもしれないということである。

図3の写真は、広い道路がまっすぐに通っている。したがって、本来は車が通りやすく作られたものであろう。そのために堀を埋め立てて形成したのであるが、そもそも車を中心に考え、人間のスケールで考えていなかったため、結果的に人も車もいないガランとした通りになってしまったわけである。この経緯は、図3の説明からは極めて読み取りにくいのはたしかである。

図3（江東区の街区と道路）の特徴をまとめると、

・江戸時代から継承されてきた街区である
・掘り割りを埋め立てて道路を整備した（注釈参照）
・近代の、整形を基本とする市街地整備の典型である
・機能的・経済的に短絡されている（第9段落）
・車に配慮した空間で、人間スケールの空間ではない（第9段落・図3）

となる。これを過不足なく説明しているのは③である。

① 「江戸の歴史的な町並みを残しつつ複合的な」が誤り。

② 「人間スケールの空間的記憶とその継承を重視」が誤り。これは山の手のように、江東区とは対比的な街区の説明である。

④ 「オープンスペースと眺望・景観を売りものにして」が誤り。「オープンスペースと眺望・景観を売りものにして」開発されたのは、江東区ではなく、江東区同様、水資源活用から立地した工場敷地跡地である。

⑤ 「複雑な地形が連続している地の利を生かし」が誤り。これは山の手の説明であり、江東区の説明ではない。

問4　【文章中のキーワードを適切に言い換える問題】

（正答率35・8％）　正解は②・⑥

選択肢が六つあり、そこから二つを選ぶ問題。正答率は両方とも正解だった場合のものと思われる。一つだけ正解の場合に部分点を与えるかどうかはプレテストの結果を踏まえて判断するとの注意書きが解答に付されている。

選択肢の数が多かったり、複数から選んだりする場合は、従来から正答率が下がるが、それにしても極めて選択肢が短く、紛らわしいものもないにもかかわらず、これほど正答率が低いのは、本文が読み取れてないこと、情報量の多さについていけてないということに尽きるのではないだろうか。生徒は、文章や資料の内容を理解していないと思わざるをえない。

筆者は、繰り返し路地の形成には地形が重要であることを述べている。第5段落にも「路地は地形に深く結びついて継承されてきた」とある。また、第9段落で、筆者が評価する山の手について「否応なく地形、自然が関連する」とあり、このように自然とのつながりを持つ居住区形成には、「地区街区の歴史的な空間の記憶を人間スケールの空間にして継承する」ことが必要だと述べている。

さらに、正解に至るヒントとして、第3段落と第4段落の間にある「路地の形成とは記憶・持続である」という見出しにも注意するとよい。すなわち、路地とは、地形に関連するということ、さらに歴史的に体験されてきた空間を継承している（記憶している）ところであると言える。このことに触れている選択肢は②と⑥である。

① 路地は自然とのつながりは深いが「自然発生的に区画化された」ものではないので誤り。

③ 「大自然の景観を一望できる生活空間」は、超高層マンションならあり得るかもしれないが、路地ではない。ただし、超高層マンションであっても、大自然の景観を一望できるとは限らないので、いずれにしても誤り。

④ 「都市とは異なる」が誤り。本文は都市計画について論じている。

⑤ 「通行者の安全性を確保」が誤り。本文中には述べられていない。

問５　【設定した条件を踏まえ、情報を統合して論じ得る内容を適切に選ぶ問題】　（正答率４４・８％）　正解は③

本文では触れられていない「緊急時や災害時の対応の観点」を加えて路地的空間について議論した場合、成り立つ意見を選ぶ問題であるが、このように本文にはない内容をもとに可能性を推測させる問題は、従来は見られなかったものである。

これまでの学習経験から、生徒は「文章との一致を手がかりに明確な解答を求める」ということに慣れている。文章の中には述べられていないことを可能性として推測するという状況自体に慣れていないので、こういうタイプの問題には当惑してしまうのである。もしかしたら、設問の意味を理解できず、投げ出してしまった生徒もいるかもしれない。

路地の特徴を改めて整理すると、次のようにまとめることができる。

・どこかで体験したことのある記憶がよぎる（懐かしい感覚）
・自然性が継承されている
・通行者も含め、コミュニティの中につながりがある
・地形に深く結びついて継承されている
・目的到着点を持つ参道型空間で、折れ曲がって分かれ次の参道空間に結びついている
・クルドサック型（袋小路）である
・歴史的な空間の記憶を人間スケールの空間にして継承する
・都市居住にとって「ふれあいと場所」の原風景である

「緊急時や災害時」という設問条件と右の波線部とを結びつければ、路地が避難には向いていない空間であることは容易に推測できるであろう。しかしながら、そもそも「路地」というものがイメージできる者とできない者とで、この条件が意味することに対する推測に差ができてしまうかもしれない。

路地の特徴について過不足なく説明し、緊急時や災害時の対応について路地の問題点を的確に指摘しているのは③である。

しかしながら、選択肢が長いこと、本文全体を踏まえなければならないことを考えると、右のような路地の特徴を整理するような時間的余裕はない。受験生にとって、このような問題は、選択肢を本文の内容と照合しながら吟味する以外に打つ手はないだろう。

① 「機能性や合理性を重視する都市の生活」とある。たしかに江東区や超高層マンションの再開発においては機能性・合理性が重視されているが、都市がすべてそうなっているわけではない。「路地的空間は緊急時の対応を可能にする密なコミュニティを形成する」という点は、可能性としては否定できないだろう。しかし「密なコミュニティ」が「自然信仰的な秩序とともにある」ということは述べられていないし、「近代的な計画に基づいて再現することが難しい」については本文の内容と矛盾する。筆者は路地的空間が近代都市計画の新たな原点になると考えている。よってこの選択肢は誤り。

②　「自然破壊につながるような区画整理を拒否するため、居住空間と通行空間が連続的に広がらず」の部分が、本文の内容と矛盾する。日本の路地的空間は、区画整理された街区にはないとは書かれているが、それは路地的空間が「自然を破壊するから」という理由で区画整理を拒否したわけではない。また、路地的空間においては、居住空間と通行空間とがつながっていることが第2段落に書かれている。よってこの選択肢も誤り。

③　「豊かな自然や懐かしい風景が残存している」「持続的に住みたいと思わせる生活空間」「相互扶助のコミュニティが形成されやすい」がいずれも路地の特徴に合致している。また、「区画整理がなされていないために、災害時には、緊急車両の進入を妨げたり住民の避難を困難にしたりする」は、路地の地形から一般的に推測できる内容として妥当である。よって③が正解である。

④　「災害時の避難行動を可能にする機能的な道・道路である」が誤り。本文に書かれていなくても、折れ曲がった道路や袋小路が避難に不向きであることは、常識で判断できる。また、「（路地の）機能性が合理的に評価されたり、活用されたりしにくい」という点も、路地の特徴に反する内容であるので、この選択肢は誤りである。

⑤　路地的空間が「近代以前の地域の原風景をとどめる低層住宅」の空間であるという内容は妥当であるが、冒頭の「再開発を行わず」という点は誤り。路地的空間においても再開発は行われている。問題は、再開発において、路地的空間を継承するかどうかにある。また、選択肢後半の「隣接する欧米近代志向の開放居住空間のコミュニティとは、価値観があまりにも異なるため共存できない」という内容は、本文には書かれていない。したがって、この選択肢も誤り。

第3問　文学的文章

■ 出典

光原百合他『アンソロジー　捨てる』　（二〇一五　文藝春秋社）

■ 本文解説

オスカー・ワイルド「幸福な王子」のあらすじと、そのスピンオフ作品のような文章とが一つになっている小説である。

「幸福な王子」では、王子は町に貧しい人が大勢いることを悲しみ、自分の体から金箔や宝石を外して貧しい人のところへ届けるようにツバメに頼んで、最後にはツバメは凍え死に、王子は溶かされてしまう。しかし、王子の心臓と死んだツバメは、最も尊いものとして、天使によって天国に運ばれるという結末によって、美しい自己犠牲の感動的な物語になっている。

しかし、スピンオフされた作品の中では、王子のために尽くしているツバメのことが理解できないものの、気になってしまう仲間のツバメ「あたし」の視点から、王子とツバメの行為が語られ、「あたし」の中で、自己犠牲の目的は、結局他者のためではなく自分のためだったのではないかという疑問が呈される。自己犠牲は、自己満足にすぎないのではないかという懐疑が「幸福な王子」を美談で終わらせていない。「幸福な王子」の話を、もし現実として考えたら、王子とツバメの行為は到底理解できないものとして、強い違和感を読む者に与えるかもしれない。その違和感の解消が、「あたし」の語りによって試みられている。

従来のセンター試験は、漢字は論理的文章で出題され、小説では語句や表現の意味が問われる形式だったが、プレテストでは小説で漢字が出題されている。

内容に関する問いでは、問2以外は正答率がかなり低くなっている。本文

は従来の小説問題の五分の三以下という短さであり、文章自体も非常に読みやすいものであるが、選択肢の作り方が過剰なほどに凝っているので、受験生が戸惑ったのではないだろうか。

小説の出題のねらいとして、複数の文章を読み比べることが意識されたとしたら、それは必ずしも成功しているとは言いがたい。むしろ、選択肢を読み比べることに労力を費やさなければならなかっただろう。また、「テクストを的確に読み取る力を問う」と出題のねらいにあるが、これもむしろ「選択肢を的確に読み取る力を問う」ているのではないかと思われる節がある。その選択肢であるが、これまでの五択から三択、四択へと減っているものも多くあるものの、本文には根拠を求められない選択肢や、明確に正解であるという根拠が曖昧な選択肢もあり、これまでのセンター試験の小説より難しいという印象を多くの受験生がもったことは容易に想像できる。小説の解釈より、作問者の解釈の是非を問われている印象が拭えないという点で、問題としては改善の余地が大きいのではないだろうか。

■設問解説

問１　【漢字の問題】

漢字の問題は、従来は論理的文章で五問出題されていたが、今回は三問。いずれも音読みである。形式はセンターと同じであり、正答率もそれほど変化はないと思われる。（ウ）は、「所帯」という語句を書くことが少ないことと、「帯同する」という語句が身近でないため、高校生には漢字が思い浮かびにくいと思われる。しかし、これも従来のセンター試験の漢字問題で同様の傾向が現れていた。

（ア）**仰**々しく　①業績　②苦行　③凝縮　④異形　⑤**仰**天

（正答率６６・６％）正解は⑤

（イ）**到**来　①奮闘　②転倒　③当意　④周**到**　⑤不党

（正答率５８・２％）正解は④

（ウ）所**帯**　①悪態　②台頭　③怠慢　④安泰　⑤**帯**同

（正答率４３・２％）正解は⑤

問２　【登場人物の特徴に対する根拠を本文中から指摘する問題】

正答率（８０・８％）　正解は③

設問は『若者』の『風変わり』な点について説明する場合、本文中の波線を引いた四つの文のうち、どの文を根拠にするべきか」とあって、凝った作りになっているが、要するに『あたし』は『若者』のどういうところを風変わりだと思ったのか」という問いと考えればよい。問いとは、なるべくわかりやすくすべきであって、凝った表現で解答者を試すのは、問いとしては適切ではない。何とかこれまでの傾向から変えたいという意図の表れかもしれないが、今後、受験生に問いを読み解くという負荷が加わるとしたら、何の力を問うのかというねらいにずれが生じてしまうおそれも否めないだろう。

選択肢は四つしかない上に、「若者」が「風変わり」であることを説明しているのは③しかない。あとは、「風変わり」に該当するような内容ではないので、よほど深読みしない限りは素直に解答にたどり着くだろう。

①　「つやのある黒い羽根に敏捷な身のこなし、実に見た目のいい若者」という表現が「風変わり」とは到底考えられない。

②　「彼」の様子を描写したものではない。「彼に興味を示すものは何羽もいた」を、彼が「風変わり」だったからとするのは無理があるのではないか。そもそも、仲間が「彼」に興味を示すのは「彼」の見た目がいいからであって、風変わりだからではない。

④　「彼」が「あたしたち」と一緒に過ごしたことが事実として述べられているだけで、「風変わり」と思われる叙述はどこにもないので、誤り。

問３　【登場人物の心情を説明する問題】

（正答率２４・８％）　正解はⅠ群②　Ⅱ群③

Ⅰ群、Ⅱ群の両方の答えが正解でないと得点できないため、正答率が低くなっている。組み合わせ問題は、従来から正答率は低くなる傾向が強い。しかし、Ⅰ群、Ⅱ群とも、選択肢はそれぞれ三つずつしかない。それでもこれだけ正答率が下がったのは、組み合わせ問題だからというだけではなく、選択肢が選びにくかったからではないかと思われる。

Ⅰ群の正解は②だが、選択肢の最後の「これ以上踏み込まれたくないと嫌気がさしている」という心情には、違和感を持った生徒が多いのではないだろうか。むしろ、選択肢①の『『あたし』の利己的な態度に、軽蔑の感情を隠しきれない」を選びたくなるのではないか。傍線部Ｂの直前には「彼は馬鹿にしたような目で、ちらっとあたしを見た」という表現もある。

また、選択肢②には、若者の行動を「あたし」が「自己陶酔だと厳しく批判する」とある。たしかに「あたし」は小説の最後で、ツバメの行動を自己陶酔ではなかったのかと感じてはいるが、傍線部Ｂの場面では彼の行為が理解できなくて追及しているにすぎない。また「彼」も、「あたし」の追及が「彼」の行動を自己陶酔だと批判していると感じているとは到底読み取れない。もちろん、選択肢①にも、「子孫を残すというツバメとしての生き方に固執し」や、「生活の苦しさから救われようと『王子』の像にすがる町の人々の悲痛な思い」という、本文の内容と矛盾する表現があるが、不適切である点では①も②も変わりはない。③はもっと不適切であるため、選びようがないと迷った生徒も多くいたのではないかと推測される。

Ⅱ群も、選択肢①と③が紛らわしい。正解は③だが、後半の『『彼』自身の拒絶によってふたりの関係に介入することもできず、割り切れない思いを抱えている」という解釈は根拠が明確にできない。たしかに「あたし」が「彼」に強い関心を持ち、なんとか「彼」を「王子」に尽くすことからツバメらしい生活に引き戻したいと考えていたという前提に立ち、それが彼に拒絶されたことから、「どうせ、あたしにはわからない」という言葉が発せられたということは否定できないだろうが、その心情は腹立たしさに近いものではないだろうか。「割り切れない思い」という心情には強い違和感が残る。むしろ選択肢①の「いまだに理解しがたく感じている」という説明のほうが、「あたし」の心情に近いように思われる。ただし、選択肢①は、「そうした王子」の「そうした」が指示する内容がわかりにくい。前半の文は王子を祭り上げる人間の態度について述べたものであるから、後半で「そうした『王子』」とつなげるのは、書き言葉の日本語のルールとしては適切ではないと思われる。もし、「そうした」の指示内容が、「人々によって金や宝石によって飾られ、祭り上げられること」であれば、たしかに、「彼」はそうした王子に生命をかけているわけではないので、選択肢①は誤りである。しかし、どちらの選択肢にも疑問が多く、選ぶのにかなり迷った生徒が多かったはずである。

選択肢②は、「暴力的な振る舞いで」以下文末まで、本文から読み取るにはあまりに無理がありすぎるので問題外であろう。

問４　【複数の文章の関係を比較したり関連付けたりする問題】

（正答率１９・０％）　正解は②　⑥

それぞれが三行にわたる選択肢六つの中から二つを選ぶ問題である。両方とも合っている場合を正解としているため、正答率は極めて低い。部分点を与えるかどうかは、このプレテストの結果を踏まえて検討されることになっている。

「幸福な王子」のあらすじとその後のスピンオフ小説との関係を考察する

問題であるので、本文から正解となる部分を探すことはできない。両方を読んで、その関係について述べた選択肢の中から、テクストの内容や両方の文章の関係について矛盾のないものを選ぶしかない。したがって、選択肢の内容を吟味する必要がある。

① 「Xでは、神の視点から…語られ」という部分が誤り。神の言葉によって王子とツバメは尊いものとして天国に迎えられるが、語りの視点はあくまで作者であり、神ではない。また、「Yは、Xに見られる神の存在を否定した上で、『彼』と『王子』のすれ違いを強調し、それによってもたらされた悲劇へと読み替えている」という部分も誤り。よってこの選択肢は適当ではない。

② X・Yの説明いずれも妥当なものと言える。よってこの選択肢は適当である。

③ 前半の「あたし」を感情的、「彼」を理性的とし、「あたし」が感情的であるから「彼」を批判していると解釈している点が誤り。また、後半の「Xの幸福な結末を、『あたし』の介入によって、救いのない悲惨な結末へと読み替えている」も誤りである。結末の「あたし」の介入はXの幸福な結末への疑問を投げかけてはいるものの「救いのない悲惨な結末へと読み替え」るものとまでは言えない。

④ Xを「『一羽のツバメ』と『王子』が誰にも顧みられることなく悲劇的に終わる」としている点がまず誤り。Xの結末は神によって救われる幸福な結末である。また、「Yは、『彼』と家庭を持ちたいという『あたし』の思いの成就を暗示する恋愛物語」という部分も誤り。「あたし」の思いは成就などせず、あたしは彼のことは「どうせ、あたしにはどうでもいいことだ」と見限っている。したがって、この選択肢は適当ではない。

⑤ 前半の「逆転劇」の説明は妥当であるが、後半の「その構造は、Yにおいて、仲間によって見捨てられた『彼』の死が、『あたし』によって『王子』のための自己犠牲として救済されるという、別の逆転劇」という内容が誤り。「あたし」はツバメの死を「王子」のための自己犠牲ではなく、自己満足にすぎなかったのではないかと思っているのである。したがって、この選択肢も適切ではない。

⑥ X・Yの説明いずれも妥当なものと言える。ただし、末尾の「『捨てる』という行為の意味が読み替えられている」の意味がわかりにくかった生徒がいるかもしれない。「王子」の行為は、町の人々のために自己を捨てる（自己を犠牲にする）というものではなく、単に自分にとって邪魔になるものを捨てただけではないかと「あたし」が考えているという意味である。よってこの選択肢は適当である。

問５　【テクストの構成や表現に関する問題】

a　（正答率４２・５％）　正解は④

冒頭の「幸福な王子」の記載にはどのような構成上の意味があるかという問いである。文章の構成に関する選択肢は①と④しかないので、この二つを比較すればよいが、どちらもわかりにくい選択肢である。

①は「最終場面における物語の出来事」が何を指すのかが曖昧であるし、冒頭の「幸福な王子」の記載は、内容や「王子」と「ツバメ」の行為の意味の読み替えのためであり、語りの時間を示すためと考える根拠はどこにもない。時間のずれを強調する必要もない。

④は、Yでは「あたし」が「彼」はもう死んでいるだろうと想像しているが、王子まで捨てられているとは思っていない。したがって④の内容は、矛盾はないかもしれない。しかし、「王子」の像が人々に見捨てられるという展開は、冒頭の「幸福な王子」に記載されているのであって、「あたし」にも想像できなかった展開を「示唆」しているという表現のしかたには違和感が

ある。『王子』の像も人々に見捨てられるということが、『あたし』には想像できなかったという展開が示唆されている」という表現のほうがわかりやすいのではないか。選択肢の表現については、この選択肢以外においても、かなり雑な印象を受けると言わざるを得ない。

b　（正答率３６・９％）　正解は②

記号の意味について問う問題である。また、内容との合致から考えて、候補は②と③である。

②は、「彼の性質を端的に示した」が「風変わりだった」を意味しており、その後、何が風変わりかを具体的に述べ（＝いつも夢のようなことばかり語る）、そこで記号を挟んで、「夢のようなことばかり語る」の内容をさらに詳しく説明し（注釈を加え）ている。したがって、この選択肢は適当である。

③は、「断定的な表現を避け、言いよどむ」とあるが、「あたし」は言いよどんではいないし、極めて断定的に述べている。記号の前の内容を、記号の後でより明快に説明しているわけであるから、言いよどんではいない。したがってこの選択肢は適切ではないので、正解は②である。

c　（正答率５０・３％）　正解は⑤

「あたし」のモノローグが何を表しているかという問いである。残った選択肢⑤と⑥を吟味すればよい。

⑤は、たしかに「あたし」は「王子」や「彼」の行動や思いが理解できず、疑問が湧いている。王子の像が捨てられたことを知らない「あたし」は「今度『王子』に会ったら聞いてしまうかもしれない」と言っているので、「あたし」の中で疑問は解消できていないのである。これを「揺れる複雑な心情」と表現することは妥当であろう。この選択肢は適当であると言える。

⑥は、『あたし』の内面的な成長を示唆する視点が加えられている」が誤り。「あたし」は理解しがたい気持ちを強く持っているが、これが内面的な成長に結びつくわけではない。したがって、正解は⑤である。

第４問　古文

■ 出典

紫式部『源氏物語』青表紙本（藤原定家）
紫式部『源氏物語』河内本（源光行・親行）
源親行『原中最秘抄』

■ 本文解説

『源氏物語』には、多くの写本がある。中でも藤原定家が書写したとされる「青表紙本」と源光行・親行が書写した「河内本」が代表的なものである。定家と光行・親行親子は、いずれも平安末期から鎌倉初期にかけて活躍したが、すでにこの時代に『源氏物語』の写本は乱れに乱れ、何が元の姿かわからない状態であった。定家がその乱れに対し、意味が通らなくてもそのまま残すことを心がけたのに対し、光行・親行親子は、積極的に手を加えて意味が通るように整えたという違いがある。

テクストは、リード文にあるように、『源氏物語』冒頭「桐壺」の巻で、亡くなった桐壺更衣の形見の品が、更衣の母から桐壺帝のもとに届けられた場面である。帝がその形見の品を見ながら、更衣のことを思い出しているのだが、そのとき思い出した更衣の顔が、青表紙本では「太液の芙蓉、未央の柳」と形容されているのに対し、河内本では「太液の芙蓉」だけで形容されている。『原中最秘抄』の記事は、その理由について親行が書いている部分である。

センター試験では、古文で複数の文章が出たことはない。したがって、三

つの文章、しかも同じ作品の写本とそれに関する文章が並んでいるのは、かなり新しい傾向と言っていいだろう。しかし、せっかく複数の文章が並んでいるのに、設問はそれぞれの文章の中で解決できるものになっており、複数の文章を比較したり、統合して考えたりする設問はない。これでは一つの文章を出してきたセンター試験の問題と大して変わらない。また、本文の難易度も、センター試験と同程度と思われ、設問の作り方、難易度のいずれもそれほど新しさを感じない。従来通り、語彙力・文法力を鍛えていれば、読み取れる問題である。

また、二つの写本を比べるという、これまでにない形式の問題ではあるが、取り上げられている場面は、教科書にも載っている有名な場面である。授業や問題集で学習していた生徒と、そうでない生徒では差が出てくるのではないかという心配もある。

■ 設問解説

問１　【文脈との関連から省略された部分を補う問題】（正答率４６・３％）　正解は①

従来問１は、語句の解釈が三問出題されていたが、今回のプレテストでは、正面から語句の意味を問う形式の問題はなくなっている。今回の問１は、省略されている部分を補うというもので、傍線部（ア）の直前の部分を受けた「しるし」の意味が理解できること、また助動詞「まし」の未然形に接続助詞がついた「ましかば」の意味が理解できること、さらに選択肢中に用いられている形容詞の意味が理解できることが正解に至るポイントであろう。語彙力・文法力と文脈を読み取る力が同時に試されている点で多少の目新しさはあるが、省略部分を補う問題自体は従来の問題でも出題されていたので、受験生にとっては見慣れた問題と言えるかもしれない。

傍線部（ア）を、直前の部分も含めて訳すと、「亡くなった更衣の住む所を探し当てたという証拠のかんざしであったならば」となる。帝は更衣の母から更衣の形見を献上されたものの、幻術士が楊貴妃から直接受け取って玄宗皇帝に届けたかんざしのように、あの世の更衣から直接受け取ったものであったら、どんなに嬉しいだろうと思っているのである。正解は①である。その他の選択肢の訳は次のとおり。

② どんなに見苦しくないだろう。
③ どんなに悔しいだろう。
④ どんなに風情があるだろう。
⑤ どんなにつまらないだろう。

問２　【文中の和歌について、文法・修辞・語の意味を通して内容を読み取る問題】（正答率２２・６％）　正解は④

問２は従来文法の問題であったが、今回は「文法や修辞、語の意味を通して内容を適切にとらえる」というねらいの通り、文法・修辞・内容理解が融合した問題になっている。和歌は多くの生徒が苦手とするものだが、さらに文法だけが問われているのでなく、内容の解釈も必要となると、生徒にとっては相当難しく感じたに違いない。「適当でないもの」を選ぶという問い方も苦手とする生徒がいる。

傍線部（イ）の歌の意味は、

亡き更衣を探しにいく幻術士がほしいものだ。たとえ人づてであっても、更衣の魂がそこにあることを知ることができるように。

となる。「もがな」は願望の終助詞であるが、自分が〇〇したいという願望ではなく、他に〇〇があってほしいという願望を表す。注釈からもわかるよ

うに、「長恨歌」では、玄宗皇帝は幻術士に頼んで楊貴妃の魂を尋ねて行かせ、探し当てた楊貴妃から幻術士はかんざしを持ち帰った。桐壺帝は、それを踏まえて、更衣の魂のありかを探し当ててくれる幻術士がほしいと思っているわけである。したがって、④の「幻術士になって更衣に会いに行きたい」という解釈は間違っている。適当でないものを選ぶので④が正解。後の選択肢の内容は間違っていない。

問３　【傍線部を解釈する問題】　（正答率３０・５％）　正解は①

「いかでか」が反語であること、「自由なり」が「わがまま、勝手気まま」という意味であることを知っていると、①が正解であることがすぐにわかる。

「しるべき」の「しる（知る）」には、「対象をしっかりとらえて自分のものとする」という意味がある。また別の本では、「われはいかでか自由のことをし侍るべき」とあることからも、ここでの「知る」は「自分の思いとしてする」という意味に解釈するのが適当であろう。

しかしながら、こうした知識がない場合は、選択肢に惑わされると思われる。「問題のねらい・小問の概要」にも、「テクストの中の会話に着目して、文脈を踏まえて登場人物の言動の意味を適切に示す」力を問うとある。語句や文法に頼らずとも、文脈から判断できる力を求めようとしていると考えられる。

文脈から考えてみると、直前に親行が、「楊貴妃を芙蓉と柳にたとえ、桐壺更衣を女郎花と撫子にたとえているが、どれも二句ずつ並んでいて、いいように聞こえるのに、あなた様がお持ちの写本では、『未央の柳』が消されているのは、どのような理由があるのでしょうか」と俊成に尋ねている。これに俊成が答える部分が傍線部である。俊成は傍線部の直後で、「行成卿の自筆の本に、この一句を見せ消ちにし給ひき」と語っている。つまり、「未央の柳」を消した理由を、行成卿自筆の本にならったからと答えていることからも「いかでか自由の事をしるべき」は、「どうして勝手なことをするだろうか、いやしない」と解釈するのが妥当である。

問４　【傍線部について表現の特徴をとらえる問題】　（正答率２０・５％）　正解は⑤

正答率が著しく低いのは、おそらく、文章全体の構成や人物関係をとらえることができていないからではないかと思われる。

本文の展開は次のようになっている。

光行が存命の頃、五条三品藤原俊成の写本では、「太液の芙蓉、未央の柳」のところで「未央の柳」が消してあるのを不審に思う。

↓

親行を俊成のもとへ使いとして遣り、その理由を尋ねさせる。

↓

俊成は、「行成卿の写本にそうしてあったから、自分もそうしたのだが、気になるので『源氏物語』を何度も見直していると、「若菜」の巻で納得がいった」と答える。

↓

光行が、親行に、「俊成卿は若菜の巻のどこに同じようなものがあると言ったのか」と問うと、親行は「それは尋ねなかった」と答えたので、光行から叱られた。

↓

親行は、ひとり籠もって若菜の巻を何回かみているうちに、俊成の言ったことが理解できた。六条院の女試楽で、女三の宮を青柳にたとえていることから、柳を人の顔にたとえることは多く行われて平凡なので、自分の

写本でも消してあると俊成は言おうとしたのである。

↓

親行は歌人として優れた俊成が、『源氏物語』の奥義までも極めていることに感心する。

↓

しかし、定家の写本には、「末央の柳」が書かれているので、さらに俊成卿の娘にそのことを尋ねる。

↓

俊成卿の娘は、「それは伝わっている写本が誤って書き入れたのではないか。太液の芙蓉、未央の柳では、あまりに対句すぎることをよく思わないで消した人もいたのだろう」と言った。

↓

そこで、親行は自分の本には「未央の柳」は入れなかった。

古文の常として、主語が明記されていないので、人物関係をつかむのが生徒にとっては相当に難しいと思われる。

特に傍線部に関しては、「見せ消ちにせられ侍りしにこそ」とあり、問３で、俊成が「見せ消ち」になっているのは、行成の写本にそうあったからだと言ったことが取り上げられているため、問４の「見せ消ちにせられ侍りしにこそ」も行成の行為であると思った生徒もいたのではないだろうか。その点、より正確に読解できる上位層のほうが、間違いやすかったかもしれない。しかし、傍線部の直後に、「三品の和才すぐれたる中にこの物語の奥義をさへきはめられ侍りける」とあり、親行が感心しているのは俊成なのである。俊成は、自分の写本を作る際に行成の写本を元にしたかもしれないが、それにならうかどうかは俊成の判断である。俊成は単純に行成のしたことをそのまま踏襲したのではなく、そこに疑問を持って調べ、納得した上で「見せ消ち」にしたわけである。したがって、「見せ消ちにせられ侍りしにこそ」の主語は俊成と考えなくてはならない。したがって正解は⑤である。

①② 主語が異なるので誤り。

③ 「親行の不満」が誤り。親行は「ありがたき事なり」と感心している。

④ 親行は光行から叱責を受けたものの、光行に対して書いているわけではない。作品自体が広く一般に向けて書かれた注釈書である。

問５ 【傍線部の表現効果を説明する問題】 （正答率２２・７％） 正解は③

問題作成のねらいには、「複数のテクストを比較して、相違点を吟味し、表現の効果を適切に示す」とあるが、青表紙本と河内本を比較する必要はまったくない。傍線部は河内本にあり、桐壺冒頭における桐壺帝と桐壺更衣との関係を押さえた上で、傍線部が読解できれば、解答が導き出せる。

傍線部の解釈は次のようになる。この解釈に合致する選択肢は③である。

楊貴妃の中国風だったという装いは、端正で美しかったであろうが、更衣の親しみやすく可憐であった様子は、女郎花が風になびくさまよりも弱々しく、撫子が露に濡れているさまよりも可憐で、心引かれる顔かたちや人柄を思い出すにつけても、

① 楊貴妃と更衣が対比されているのは、内容から明らかではあるが、過去推量の「けむ」にはその対比を強調する働きはない。対比を示しているのは「こそ…けめ」という係り結びの逆接用法である。したがって誤り。

② 「けうらにこそありけめ」は、確かに楊貴妃の容姿を形容しているが、逆接用法によって、むしろ強調されているのは、直後の更衣の方である。

したがってこの選択肢も誤り。

④　「撫子」の露に濡れている様子が更衣の可憐さを引き立てているのはたしかだが、「若くして亡くなってしまった」という説明が不要である。おそらく「露」＝はかないというイメージから結びつけようという意図があると思われるが、女郎花・撫子の対句的表現から考えても、撫子の部分で更衣が亡くなってしまったことを解釈に加えるのは適当ではない。よって誤り。

⑤　更衣の魅力を、女郎花と撫子を引き合いに出すことによって強調しているものの、〇〇よりも△△という表現を繰り返すこと自体が更衣の魅力を強調するわけではない。また、女郎花と撫子という二者との比較だけで「自然物になぞらえきれない」とまで解釈するのは無理がある。よってこの選択肢も誤り。

問６　【文章の内容と合致する説明を選ぶ問題】

（正答率２９・１％）　正解は③

内容合致を問う問題の場合は、選択肢を一つひとつ本文と照合して矛盾のないものを選ぶのが順当な解き方である。出題のねらいでは「他の複数のテクストの相違点を踏まえ」とあるが、問６で他のテクストに触れているのは選択肢の①だけである。しかも、光行・親行らが「未央の柳」を消したことを述べているだけであるから、文章Ⅱを持ち出す必要はほとんどなく、よって問６では文章Ⅲのみを解釈すればよいと言っても過言ではない。

①　親行が「未央の柳」を削除したのは、柳が春の景物であることを理由としてあげているが、これまでに見てきたように、その理由は俊成の解釈に従ったからである。この選択肢は誤り。

②　「紫式部の表現意図を無視した後代の書き込みであると主張」という前半も、「俊成から譲られた行成自筆本の該当部分を墨で塗りつぶし、それを親行に見せた」という後半も、両方とも本文の内容に合致していない。

④　「満足な答えが得られず」「光行からも若菜の巻を読むよう叱られた」が本文の内容と合致していない。

⑤　②と同様、前半、後半ともに文章Ⅲの内容とは全く合致していない。

以上より正解は③である。

第５問　漢文

■ 出典

司馬遷『史記』
佐藤一斉「太公垂釣図」
生徒のまとめ（愛日楼高等学校二年Ｃ組二班）

■ 本文解説

各文章がどういうものであるかはリード文で説明されている。それぞれの内容を簡潔に示すと、次の通りである。

文章Ⅰ

呂尚は、貧しく年老いて、（特技の）釣りによって周の西伯に知遇を得たいと思っていた。西伯は猟に出ようとして占いをさせると、占い師は「王が得るのは覇王となることを助けるものである」と言った。西伯が猟に出ると、果たして呂尚と出会い、語り合って呂尚のことを認めた西伯は呂尚を父太公が予言していた人物と確信し、太公望

と号して周に伴い、師と仰いだ。

文章Ⅱ（漢詩）

呂尚が周に行ったのは、呂尚の本意ではなく、呂尚は本当は釣り竿一本で風流を楽しんで生きたいと思っていた。だから武勇知略をたたえられても、きっと昔の釣り三昧の生活を懐かしんでいただろう。

文章Ⅱ（C組二班のまとめ）

文章Ⅰと文章Ⅱの呂尚の思いの違いについて取り上げている。二つの文章だけでなく、漢詩の作者佐藤一斎について調べ、佐藤自身の心境が呂尚に託されているという説も紹介している。コラムとして「太公望」の意味について取り上げている。

■設問解説

漢文も三種類のテクストを用いて作問されている。しかし、やはり問いは、それぞれの文章に限定されており、複数のテクストを比較したり、統合したりして考察しなければ解けないという問題はまったくない。古文と同じく、基本的な用字や句法などがきっちり問われており、大問中、最も従来の形に近いものになっている。たとえば、漢文と現代文による評論などとを組み合わせて、内容について深く考察させるという出題などもかんがえられるが、そうすると漢文なのか現代文なのかの線引きが難しくなるのだろう。したがって、漢文を読んで理解する力を問う以上、従来の形で出題せざるを得ないのではないだろうか。

とすれば、用字、句法、訓点など、基礎的な知識をしっかり身につけることを大切にするのがよいだろう。

問１　【漢字の意味を問う問題】

（正答率（１）７７・６％（２）６４・６％）　正解は（１）①　（２）⑤

「嘗」（かつて）「与」（ともに）は、いずれも高校一年の段階で教科書に出てくる基本的な語である。特に「嘗」は模擬試験でもたびたび出題されるので、全設問中最も正答率が高いのもうなずける。むしろ他の問いの正答率が低すぎると言ってもよい。古文、漢文については、受験に必要ないという生徒もいること、また、今回のプレテストでは第１問から順に解くことという指示があったことから、現代文で相当時間をとった生徒は、ほとんど漢文を解く余裕はなかったのではないだろうか。実際には漢文は最も解きやすく、得点源になり得る問題であった。

問２　【文字の意味を問う問題】

（正答率（ア）１２・６％　（イ）２６・１％）　正解は（ア）②　（イ）④

「果」は「果たして」と読み、「思った通り」「案の定」という意味である。生徒にとっては日常的に用いる言葉ではないかもしれないが、文章を読むことを通して身につけたい言葉である。また、「当」は高校一年の比較的早い段階で学習する再読文字であるから、これも必ず覚えておかなければならない。しかしながら、正答率はどちらも極めて低い。基本的知識が身についていないということの現れではないだろうか。

問３　【訓点と書き下し文の問題】　（正答率３０・３％）　正解は⑤

読解に必要な知識は、次のような基本的なものである。

・将（再読文字）

将ニ～ントス（今にも～しようとする）

・卜（ぼくス）　占う

①　「将」が「当」（まさニ～べし）の読み方になっているので誤り。

②　「将」を再読文字とせず、西伯の将と解釈しているが、西伯は周の王（文

王）であり、将軍ではない。よって誤り。

③　「将」を「はタ」と読んでいるが、その場合は、「将た～んや」と読み、「どうして～であろうか、いや～ではない」や「まさか～ではあるまい」などと訳す。ここでは、読み方が疑問形になっているのでまず間違いであるが、あえて反語として訳しても「西伯はどうして狩りに出てそれを占うだろうか、いや占わない」となり、本文の内容と相容れない。したがって誤り。

④　「将」を「ひき㐌テ」と読んでいるが、文意は「西伯は狩りに出る者を引き連れて、これを占った」となり、狩りの吉兆を占うのではなく、率いる者たちを占うことになる。文章の内容とずれてしまうので誤り。

問４　【傍線部の解釈を問う問題】　（正答率４１・５％）　正解は③

傍線部を書き下し文にすると、「子は真に是れなるか」となり、「あなたは本当にその人（父が言っていた聖人）ですか」という意味になる。

選択肢のうち、「子」を「我が子」と解釈しているものは、本文の内容とかけ離れてしまうので、まず除外してよい。すると、②と③が残る。

このうち②は、反語の訳になっているので、読み方とも矛盾するし、西伯が呂尚と出会って喜び、師として迎えるという本文の内容とも合致しない。したがって正解は③である。

傍線部には訓点がつけられ、難読語もない割には、正答率は五割を切っており、問題レベルに対して低すぎる。時間がなかったことが最も大きな原因かもしれないが、基本的知識の不足もあるとしたら、徹底して漢文の基礎を身につける必要がある。

問５　【漢詩についての知識を問う問題】　（正答率１４・７％）　正解は①・⑥

正答率が問２の３に次いで低くなっているのは、選択肢の中から正しいものを「すべて」選ぶという形で出題されたからであろう。このような形式は数学などで多く出題されており、今後国語科でも増えていくと思われる。選択肢の吟味を丁寧に行う必要があり、今回のように選択肢が六つある場合には、一層難しく感じるに違いない。もちろん、漢詩について基本的知識を身につけておくことが第一に求められる。

漢詩についての説明の是非を問う問題であるから、選択肢を一つずつ検討していけばよい。

①　漢詩の形式、押韻とも正しい説明であるので、正解。

②　漢詩の形式を律詩としている点で誤り。また対句もない。

③　漢詩の形式を古体詩で、四連構成としている点が誤り。

④　漢詩制作を「中国語の訓練を積んだ一部の知識人しか作ることができなかったとしている点、その結果、「日本人の創作活動にはならなかった」が誤り。

⑤　「日本人は江戸時代末期から漢詩を作るようになった」が誤り。漢詩はすでに八世紀から日本でも作られている。

⑥　日本人が古くから漢詩に親しんできた歴史について的確に記述しているので正解。

問６　【本文中の記述の誤りを指摘し訂正する問題】　（正答率２２・５％）　正解はＡ群③　Ｂ群⑤

完全正答であるが、Ａ群の①に対し、Ｂ群の①②が対応し、以下同様であるので、Ａ群の間違いが特定されれば、Ｂ群は２択ということになる。間違いを見つけるということは、その理由がわかっているということであるから、Ｂ群から訂正文を選ぶことは簡単であるはずである。しかし、これも正

答率は極めて低い。

最後のほうの問題で、しかも組み合わせという形式に手をつけられなかった生徒もいるかもしれない。また、文章Ⅰが正確に読み取れていない中位レベル以下の生徒は、コラムの内容と文章Ⅰの内容との整合性を照合することができず、選択肢だけを見てなんとなく選んでしまったということも考えられよう。

ただし、コラムの間違い探しについては、解釈力や考察力というよりは、情報に関する注意力を問うていると言ったほうがよく、クイズのような問題で、はたしてこれでどのような国語力を測るのか、疑問が残る。

A群は、①②については正しく記述されている。③は、呂尚は、太公望という号の通り、もともと文王（西伯）の父である太公が望んでいた人物である。したがって③の記述が誤り。

B群は、A群の③を選ぶ際の判断に基づき、⑤が正しい。

問7　【漢詩が表現している主人公の心情を読み取る問題】

（正答率３３・０％）　正解は⑤

これも「複数のテクストの相違点を踏まえ」ることをねらいとしていると書かれているが、文章Ⅱについて考えればよい問題である。むしろ、選択肢によっては、文章Ⅰを踏まえると間違えてしまう可能性もあるので、注意しなくてはならない。設問では、「漢詩からうかがえる太公望の説明」と明確に書いてあるので、あくまで文章Ⅱから判断して答えを見つけるべきである。

文章Ⅱでは、漢詩は現代語訳が付され、生徒がまとめをしているので、漢文というよりは現代文の力が問われている問題のように思われる。二〇一〇年に黄子雲「野鴻詩的」が出題された際、問五に杜甫の「蛍火」が現代語訳つきで出題されたが、こちらのほうが、本文との融合性、難易度のいずれにおいても優れた出題であったように感じる。

しかし今後、このように現代文との融合問題が増えることは考えておくほうがよい。例えば、評論を理解するために漢文の知識が必要になるというような問題形式が出てくると、ますます難易度が上がるに違いない。新学習指導要領でも、「古典探究」以外は、現代文、古典という科目名がなくなったが、テクストに頼ったジャンル分けではなく、英語のような四技能に着目した指導方法へと、国語科もさらに大きく舵を切ったほうがよいのではないかと思われる。少なくとも、そのような学習によって「話す・聞く・書く・読む」という技能を高めていけば、新テストが要求するレベルはクリアできるに違いない。

問7のように説明の正誤を見る問題は、一つずつ選択肢を吟味していくしかない。選択肢はそれほど長いものでもないし、文章Ⅱがほぼ現代文によって出題されていることを考えると、三割しか正答していないのはかなり低いと言えよう。

① 「文王のために十分活躍することはできなかったという太公望の控えめな態度を表し」が誤り。太公望は周に仕え、殷を討伐するという功績をあげたが、太公望自身は本当は昔のように釣りをして暮らす生活をしたかったというのが詩の主旨であり、「謬りて」は、周に連れて行かれたことが本意ではなかったという気持ちを表すものである。

② 「殷を討伐した後の太公望のむなしさを表現」が誤り。①で述べたように、太公望は昔の生活を思い、現在の境遇を思いがけないことと感じているのであって、殷を討伐した後のむなしさについては、どこにも述べられていない。

③ 「文王に見いだされなければ、このまま釣りをするだけの生活で終わってしまっていた」が誤り。文章Ⅰは、呂尚が自ら文王に仕官することを願

って釣りをしているので、それを配慮すると、この選択肢を選んでしまう可能性があるが、ここで問われているのは、あくまで漢詩における太公望の心情である。漢詩では元の釣りをするだけの生活を夢見ているわけであるから、「文王に見いだされなければ・・・終わってしまっていた」という解釈は当たらない。

④　「殷の勢威に対抗するために文王の補佐となった」「その後の待遇に対する太公望の不満」が誤り。この選択肢については、文章Ⅰの内容を踏まえなければならないが、どちらも文章Ⅰには書かれていない。

⑤　太公望の「夢」を正確に記述している。よってこれが正解。

⑥　「かなうことなら故郷の磻渓の領主になりたい」が誤り。文章Ⅰにも漢詩にも、そのような叙述はまったくない。

（平成三一年一月九日）

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料（ＰＤＦ）もダウンロードできます。

第一学習社　広島本社
広島市西区横川新町七番一四号
ＴＥＬ　〇八二-二三四-六八〇〇